新学期

青空子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新学期

【Ｎコード】
Ｎ２６９６Ｂ

【作者名】
青空子

【あらすじ】
二学期初めて見たあいつが、私には何だか、一学期より凛々しく見えた。

そいつは来るなりこう聞いた。
「夏休み何してたの？」
９月１日、ＨＲが始まる５分前。教室内ではお互いの夏休みを語り合う声で充満していた。
私の隣の席のこいつもまた、いまその一人に入った。高松。夏休み前よりも焼けた。
「…いろいろ。親の実家に帰ったり、ビデオ借りて見たり、とか」
改めて言われると覚えていない。さして内容の濃い事はしていないと思う。部活もしていないし、…そういえば学校に来たのも懇談と、講習の数回だけだ。
高松はふうん、と言って机に肘をついた。顔を私の方に向けて。
こいつの焼けた顔を見て、そう言えばこいつは吹奏楽部だったな、と思い出した。そして同時に、何故焼けているんだ、と思った。室内楽、なのに。
「…吹奏楽って、やけるもん？」
聞かれると、一瞬？マークを頭上に出して、２秒後にああ、と頷いて自分の頬に触れた。「そとで練習する事が多かったから」
私は曖昧にへえ、と言った。吹奏楽の事は、全く、ゼロから分からない。
…でもそう言えば、こいつが楽器を持って外を知らない人（多分楽器を持っていたので先輩だろう）と歩いているのを見た事もあるような気がする。
「…そっちは何してたの」
聞くとすっぱりと、クラブ、と言われた。ずっと？ずっと。とお互いに一言の会話を投げた。私が微妙な顔をしているのに気付いた高松は、はは、と笑った。
「たいへんそうだにゃー、とか思った？」

「語尾の台詞は消して、そっくりそのまま思った。」
即答すると、正直だなあ、と笑われた。そして、でも別にそんなに大変でもないよ、とも。「もう学校来てる感覚とおんなしだからね。苦じゃないもん」
成程、と思った。結局はやっぱり、自分のメンタル的な問題でほとんど解決できるのだ。学校があったってなくったって。
暫くして、高松を呼ぶ女子の声が聞こえた。その人も、たぶん吹奏楽部だったと思う。すこし二人で話をしてから、音楽室の方に消えて行った。

苦じゃないもん

もう一度、高松の言った台詞が脳裏に浮かんだ。
私は自分でも気付かない内に、大きなため息をついた。
…自分の中に、今何もない事を悟って。

（後書き）

何てこと無い高校生の日常会話でした。
読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2696b/

新学期

2010年10月11日00時38分発行